

竹入公明党委員長の提案で国会正常化(後日談)

平野 貞夫
元参議院議員

1967(昭和42)年2月に、衆議院に進出した公明党は、国民に不安と期待を持たせていた。半年過ぎて大混乱した「健保国会」は、公明党の活躍で二つの新風が吹いた。一つは自社55年談合政治が変わるという期待、もう一つは竹入委員長の提案で混乱の国会を正常化させた条件が、自民党に「委員会の不正な採決案件を議長に差し戻し権」を持たせる国会法改正を約束させたことである。多くの国民は「これで国会は変わる」と確信した。

しかし、この国民の期待は時を待たず失望に、確信は裏切りにあう。その経過と背景を私の体験から記述するのが、この企画の狙いと思う。しかし、公明党の中にはこの衆院進出の時期に、日本の議会政治をよりの国民のために活動させようとする政治家がいた。それを応援しようとするジャーナリストがいた。それは

心であった。

ちょうどその日、柴記者から声がかかり神楽坂の小料理屋に呼ばれた。「健保国会」のご苦勞会ということとだった。気軽な気持ちで顔を出すと、私にとっては深刻な話が飛び出し驚いた。

「僕は創価学会員でも支援者でもない。竹入委員長とは取材対象で、公明党では常識や政治感覚がもつとも優れた人なので相談相手になっている。

僕の職責は公正な新聞記者であることだ。しかしそれ以上に日本の議会民主政治のことを気にしている。竹入委員長に率直に言っていることは、創価学会の教義は議会制民主主義に反し、ファシズムに通じるものだ。その宗教団体が丸抱えの公明党は、健全な議会主義政党なのか、国民の不安にどう答えるのか。

竹入委員長の見解は、創価学会の教義は宗教団体として、立正安国の実現だ。公明党は大企業や労働組合などから保護されていない大衆の幸せのための政治で、立正安国を指すことだ。宗教活動と政治活動は分けている。しかし国会議員のほとんどが熱心な学会員で、議会政治を知らない。党内で勉強しているが、時間がかかる」

竹入義勝公明党委員長と柴隆治朝日新聞記者であった。

国会運営の理論と手続きの指導役を 公明党から要請された話

「健保国会」は8月18日、参院本会議で可決し成立する。参院でも健保特例法案の中間報告という異例の手続きでの成立であったが、衆院で憲法違反の議事を避けることができた竹入公明党委員長の政治力は、国民に知られ高く評価された。

社会党は辞職した委員長と書記長を選任する臨時党大会を「健保国会」終了直後の8月20日に開き、勝間田清一委員長と山本幸一書記長ら執行部を選出した。この時、社会党の課題は崩壊した野党関係をどう修復するかであった。特に竹入公明党との関係が議論の中

酒が仕事の次に大好物の柴記者の真面目な話に、私が「堅い話はやめて飲みましょうよ」と言うと、「すまん、すまん。結論を言う」と、突然とんでもないことを言いだした。「竹入委員長から頼んでくれということだ。健保特例法案の審議では、いろいろアドバイスをしてもらって助かったと感謝していた。これから平野さんに、公明党に国会運営の理論や手続を教えてもらえんדרらうか。アドバイザー役をやって欲しい、とのことだ」との迷惑な話。

「公明党の専念した国会運営のアドバイスなんか、できませんよ。国会職員法には、政治的中立を規定していますよ」

「君は学生運動の札付きだった。出世をあきらめて、ぜひ公明党の相談役を引き受ける。公明党をつくったのは創価学会だ。議会政治は相手の意見の存在を認めることで成り立つことを理解しない人ばかりだ。

公明党がおかしくなると、日本の議会民主政治が狂ってくる。公明党を議会政治政党としてチェックするのが、マスコミの責任、国会の理論や手続を教えるのは事務局の責任だ。僕は竹入委員長に、国会運営で何かあれば、平野君に何でも相談しろと言っておいた。

事務総長や役付に相談しても、形だけの対応だ。議会民主政治を生かすために公明党をどう教育するか、この役をやるのは君しかいない。そういうスタンスで率直に相談に乗ってやってくれ。それが日本の民主政治に必要なんだ。わかるだろう」

とまで言われ、私も断れなくなった。「わかった。事務局の業務は、政党や国会議員から調査や意見を求められたら、対応することも仕事だ。公明党からそういう要請が私に集中することになって、いろいろ私が言われても私が腹を決めて対応すればいいこと。これからの日本の議会制民主政治は、公明党次第だということ肝に銘じ、ご両人の要請に応じます」

かくして80年代になって私が公明党の「裏国対」と批判されることとなる。その始まりが67(昭和42)年だった。それから半世紀という年月が過ぎた。この半世紀の間に何が起こったか。96年頃から自民党の裏工作の政治的恐喝を受け、創価学会の中でも対立が生じ、21世紀となって自民党という金魚の「糞」となったのが公明党である。

そして、自民党は健全な保守党の精神を、創価学会道することになる。効果は抜群で世論も大きく支持し、竹入委員長の評判は一段と高くなった。ところが、議会政治を強行採決の道具としか思っていない自民党右派。そしていったんはこの国会法改正を了承した社会党が、自社55年体制を続けるためと公明党の人気アップに嫉妬し、「議長の差し戻し権」の凍結という動きとなり、なんだかんだと屁理屈を言うようになる。結局、半世紀も放置・棚ざらしされ、現在では議会史の物語の中にも入らないゴミ扱いとなっている。おそらく生存している政治家や議会関係者で記憶しているのは私だけだと思う。日本国の国会の最大の問題点だ。

公明党と創価学会に始まった驕りと油断

67(昭和42)年12月4日、第57回臨時国会の招集日に、園田直副議長は厚生大臣に就任する。現職副議長から大臣就任は異例の人事で、「健保国会」での功績によるものだ。私も副議長秘書から事務局に戻り、委員部調査課で国会運営の調査と災害対策委員会を担当することになる。

68(昭和43)年は、佐藤内閣は公害問題に集中し、

という宗教性阿片の虜となって失っていった。安倍自公政権が「平和主義・国民主権・基本的人権」の憲法三原理を次々と破壊させていくなか、公明党が党是としている「平和と福祉」をかなぐり捨て、「金魚の糞」どころか先導役となっているのが日本の政治の現実だ。竹入委員長や柴記者が予想した最悪の事態となった。私の責任は体験した事実の証言で果たしたい。

葬られた「議長差し戻し権」の法改正

「議長の差し戻し権」の国会法改正は、衆院事務局にとつては懸案問題であった。新しい憲法(日本国憲法)が始まって国会が「国権の最高機関」となる。最大の問題は「議長の権威」の確立だ。自民党絶対多数の時代となって、国会審議の紛争收拾は自民党の強行採決を正常化するとき、議長の責任として辞職させることであった。これは自社55年体制でできた悪例で、野党である社会党の不埒事でもあった。

衆院事務局では「議長の権威」を確立する絶好のチャンスとして、懸命に努力し2カ月後には国会法改正案を整備した。この法改正を柴記者を通じて竹入委員長案としたことで、朝日新聞の特ダネとして大きく報

国会運営での問題はなかった。公明党とは時々議事運営で事務的問い合わせ、災害対策委員会での質問づくりに関わったくらいであった。ただ記者情報として、公明党幹部が自民党の田中角栄幹事長の要請で接触が始まったことを聞き、社会党と共闘するのか、それとも自民党との距離を縮めるのか、その距離の取り方が気掛かりになることが時折あった。

69(昭和44)年は大学紛争等が過激化し、中道政治を唱える公明党への支持は上昇した。同時に公明党の活動を危惧する勢力からの批判も増加した。その代表例が同年8月に出版予告が出された明治大学教授・藤原弘達著「創価学会を斬る」だった。同書は、年末総選挙が必至の政治情勢となる中の11月10日に刊行され、総選挙は12月27日投票で実施となった。

「創価学会を斬る」は公明党の議席減を狙った選挙妨害との声がある中で、公明党は47名を当選させ第3党に躍進する。その反動は強烈で、年明け早々には共産党が、公明党・創価学会の言論出版妨害を暴露。特別国会で社会・民社・共産の3党が、「言論出版妨害事件」のファシズム性を総攻撃することになる。

〔続く〕